**№5　テーマ『愛の実力』**

**講話日2013年8月2日**

**皆さんこんにちは。今年は本当に猛暑で集中豪雨で、また北の方は零下だとか、本当に異常な気象が続いていてお仕事もつらい状況だと推察しております。どうぞ健康に気をつけて頑張ってください。今日のお話は「愛の実力」ということで、愛というのは人間関係の力、人間と人間を結びつける力ということで人間関係の問題を考えていく上では、原理的に愛というものをちゃんと理解することが必要なんですよね。命というものは、愛によって生まれてくる。愛によって生まれ、愛によって育まれ、愛によって満たされる。そういう存在が命というものであります。生まれてくる子どもというのは、一点の曇りのない絶対的信頼を持って生まれてくる。我々も皆、生まれたときには一点の曇りのない絶対的信頼を持って生まれてきた。**

**一体何を信じて生まれてくるのか。それは、まさに自分自身が愛されるという、愛を信じて人間は生まれてくるわけであります。また全ての人が生まれてから死ぬまで愛されたいという思いを持ち続けて、生きて死んでいく。我々は人間社会の中で心をお互いに通わせながら、生きていこうと思ったら、皆が愛されたいと思ってるんだから、皆が愛する力を養わないと、心の通い合い、心の結びつき、心の繋がり、心の絆というのはつくれないわけであります。心の繋がり、心の結びつきをつくるということは、これから非常に大事な人間としてのテーマになってきてますから、そういう意味では皆が愛されたいと思っているんだから、皆がまた愛する力を磨いていかなければ、人間関係はなかなかうまくいかない。これが現実の課題であります。**

**とにかく近代は人間の本質は理性だと言っておりましたけど、今は人間の本質は理性ではない心だ、感性だ、という認識になってきて、人間観というのが、ここ50年ぐらいの間に激変してきている。とにかく、今は激動の時代であらゆるものが原理的変革を求められている。まず人間観そのものが今は人間の本質は理性ではない心だ、感性だ、という時代に激変してきている。であるがゆえに我々は、これから人間としての生き方もそうですし、会社の在り方というものも人間観の激変に合わせて変えていかなければならない。なぜなら会社といってもその実態は人間と人間との結びつきによってできているものですから、その人間の本質が感性だということ。会社の在り方も原理的に変わることが望まれているわけであります。これまでの企業というのは、資本主義経済下の企業は理性によってつくられた仕事の繋がりと役職によって繋がれたもので動いていましたけど、これからは最も大事なものは、全社員の心の繋がり、心の結びつき、心の通い合いというものをどう会社の中につくり上げるかというのが、これからの企業を活力あるものにしていくために必要になってきます。**

**どうしたらいったい会社の中に全社員の心の通い合いが実現できるのか。そのことを企業は十分に考える必要がある。そういう心の繋がりの上に仕事の繋がりを乗せ、その上に役職の繋がりを乗せて、３次元構造でこれからの企業は経営・運営をしていかなければならないという時代になってきました。そういうことを考えても、我々は愛の実力というものを磨いていくことが、これからの企業の活力のためにも大事な課題だという風に言うことができるんじゃないかと思います。**

**しかし現実は、離婚の激増は止まらない、幼児虐待はなかなか少なくなっていかない、高齢者の虐待もある…。ほとんどの人がなんらかの人間関係における悩み、問題を抱えて生きておるのが現実であります。多くの人が愛に悩み、愛に苦しむという、人間関係に苦しむという状況にすべての人がおかれている。我々が今生きている現実の大きな問題であります。今なぜ、こういう人間関係がズタズタに切り裂かれていく、いわゆる人倫の崩壊というような事態が全世界的に広がっているのか。こういう人間関係が壊れていくという問題を今の人々に与える、課することによって次の新しい時代を生きる力を命から引き出して、顕現させて、そして人類の人間性をもう１次元成長させる…それが母なる宇宙の思いが我々に人倫の崩壊という問題を投げかけているわけであります。**

**これはどういうことなのか。未来というのは今ある問題を解決し、欲求を満たすことによって、確実に出来上がっていくわけです。先見力、先を見通す力と言われますが、それを養おうと思ったら、今ある問題と欲求をしっかり見定めると、未来がどうなるかが確実にわかると言えます。今、我々の頭上に降り掛かってくる問題というのは、次の新しい時代を生きる力を人類に持たそうという配慮を持って天が人類に与える課題だということができます。まだまだ多くの人が人間関係に悩んでいる。その原因を考えてみると、人間関係そのものの原理が愛ですから、問題が生じる原因は愛を原理にしたものが３つあります。**

**１つ目は愛の欠如。いろんな問題や人間関係というものを理屈や理性だけで処理しようとして愛（思いやりや心遣い）が欠けている。ただ、理性的に合理的に規則に従って問題を処理し、また相手に対する。人間関係が冷たくなって、そういうところからギクシャクして対立が生まれてくる。仕事上、相手の気持ちを思いやりということができなくなってしまい、しなくなってしまう。現実的に多い、人間関係が壊れていく原因であります。**

**２つ目は身勝手な愛。自己中心的な愛、愛しているつもりの愛。これも非常に多いですね。ご主人は奥様のことを愛していると言うが、奥様は全然感じていない。愛のすれ違いが非常に多い。リーダーは部下のことを考えていると言うが、部下からすればリーダーなんて全然わかっていない、と。そういう気持ちになってることが多いし、また親子の関係でもそうですね。お父さんお母さんは子どものことを十分に考えて対応しているとおっしゃるんだけど、子どもの方からしたら「お父さんお母さんは俺のことなんかわかってへん」と言って、愛に不満を述べている。これは愛のすれ違いと言うか、片方からすれば身勝手な愛。現実に相手にその愛が届いていない。感じていないから人間関係が壊れてしまう。**

**最後の３つ目は愛の未熟さ。愛というのは求める愛から与える愛へと成長していく。赤ちゃんや子どもの間は愛されたいという気持ちが強いわけですけど、だんだん大人になると愛する力が求められていって、相手に愛を与えなければならない人間関係が多々出てくる。特に人の親となれば、子どもに愛を与えて、全く見返りを求めない与え尽くす愛が最終的には出てくるわけであります。そういう意味で求める愛から与える愛へと成長していく。本来はだんだんと成長していくわけですが、年を取ってもまだまだ愛されたいという気持ちが強くて、愛を与える力が不足してしまっている。相手から愛を奪うことになってしまって、どれだけ愛されても物足らない、愛を原理に人を責めるような状態になってしまって、人間関係が壊れる場合もあります。基本的に人間関係が壊れていく原因がこれら〈愛の欠如・身勝手な愛・愛の未熟さ〉の３つで考えられる。**

**そういう意味でも我々は、もっと愛とはなんなのか、愛の力とはなんなのか、愛を与えるとは何を与えることか、そういうことを考えていかないと、しっかりとした心の繋がりを築いて、信頼し合って生きて仕事をする環境をつくり出していくことは難しいと思います。ほとんどの人は愛に悩み、苦しむ状況になっている。なぜ、そうなってしまっているのか。根本的で本質的な原因を考えていくと、原因は４つが挙げられてきます。**

**まず第１番目は、近代というのは人間の本質は理性だと考えていましたから、理性的な人間になることを目標に努力してきたわけであります。人間が理性化されて、今全人類が理性の奴隷になっている…なぜそうなっていると言えるのか。それは、理性という能力は、西洋において神から人間に与えられた完全な能力だと考えられていて、人間は不完全だ。だから人間は完全なる理性に従わなければならない。この意識が非常に西洋においては強いわけであります。それが全世界を支配しており、それが強いために今全人類は理性の奴隷となって理性に支配され、抑圧され、さまざまな病気が出てきている。これは有名なジークムント・フロイトが「理性による命への抑圧がすべての病気の原因」と言っており、医学的には心療内科、精神内科という観点で病気の原因を考えています。とにかく、理性によって自分が感情や欲求や本能を支配し、コントロールする…それをほとんどの人がやっています。知らず知らずに理性の奴隷になっている。それに気が付かないほど根っから理性の奴隷となってしまっているのが、現代人の偽らざる現実の生き方であります。**

**そうなると、愛すら理性化されてしまって、同じ考え方の人しか愛せない、同じ価値観の人としか仕事ができない、感じ方が違ったら一緒に生活ができない…そういう状況になってしまっている。多くの社員が価値観が違ったら一緒に仕事ができるはずないよね、そうだよね!? と言っているわけですよ。だけど、相手が自分と同じように考えてくれないと一緒にやっていけない、相手が自分と同じ価値観を持ってくれないと一緒に仕事ができないという人間は、実は自分しか愛せない人間なんですね。そんなものは偽物の愛だ。**

**愛というのは本来男が女を愛し、女が男を愛するもの。そういう原理から生まれてくるものが愛であります。そういう意味では自分しか愛せないようなものは偽物の愛だ。自分しか愛せない愛でどうして子孫が残せようか。愛というのは本来、他者を愛するもの。けれども、今は愛も理性化され、理性的にしか愛せない。だから、宗教が違ったら殺し合う、民族が違ったら対立をする。これでは平和な世界は築けない、また平和な家庭を築けない。やはり、夫婦になってもそれぞれ成長のプロセスが違いますからね。一緒に生活をし始めるといろんな違いが目立ってくるのが夫婦の避けがたい現実であります。夫婦が仲良く一緒に幸せな生活を送っていこうと思ったら、自分しか愛せないような、狭いと言うか、理性化されてしまった愛では、夫婦の関係は決して維持することができません。結果として、離婚の激増という状況になってしまっているわけですね。**

**とにかくなぜ、今我々は愛に苦しむ状況になってしまっているのか。その学問的な原因というものを考えると、まずは愛の理性化という現実が浮かび上がってくるわけであります。理性的にしか愛せない、理性というのは真理は１つと考えるし、矛盾を排除するし、理性は画一性を追求する。だから理性は異なるものの存在を許せない。自分と違った考え方の人間を抹殺しようという、そういう恐ろしい意識をつくり出すのが理性であります。これから我々は理性の支配から脱却し、人間が理性を支配し、人間が理性を使いこなして、人間らしく生きる…そういう生き方を我々は求めていかなければなりません。**

**どうしたら一体理性の支配から自分自身を解放することができるだろうか。同じ考え方の人しか愛せない、同じ価値観の人としか仕事ができない、感じ方が違ったら一緒に生活ができない…そういう小さい自分をどのように破壊して、いろんな考え方と価値観の人と共に力を合わせて生きていくという力をどう求めて、つくっていくか。それが非常に大きな現代人の課題であります。**

**違う考え方の人と一緒に生きていくことができる力ができなかったら、永久に離婚の激増は止まりませんよ。幼児への虐待も防ぎようがない。自分の子どもが自分の言うことを聞かないと言っているようでは、虐待はなくなりません。子どもというのは、生まれながらに反抗をして成長していくという、成長の仕方が、プログラムされているんですよ。命には、生まれたときから第一・第二反抗期というものがあって、第一反抗期は欲求に基づくもので、第二反抗期は理性に基づくもの。反抗をすることによって、自分が本当は何が欲しいのか、何を求めているのかを自覚し、理性に基づく反抗をすることによって、自分の考え方や価値観がなんなのかを自覚する。そして、人とは違う俺という人生を生きていく。そういう生き方をするために、反抗をしながら生きていくという原理が命には存在します。**

**反抗しなければ本当の自分はつくれない。反抗しなければ皆と一緒になってしまう。反抗することで俺はこうだ、俺は違うという自分が出来上がっていくわけですね。それを親がちゃんと認めてあげるためには、反抗というものを嫌がらないで反抗を使って、子どもを教育し、成長させる力を持たなければならない。反抗を恐れているようでは親も先生も務まらない、と言うことができます。そういう意味でも愛というのは、考え方や価値観の違いというものを認めながら、どうそれを使っていくが、そういう力を愛は要求するわけであります。同じ考え方の人間と付き合っていくなら、愛は要らない。理性で十分だ。**

**なぜ、我々は現実に愛を必要とするのか。実際、現実には性格の違う人がいる、考え方の違う人がいる、価値観の違う人がいる、立場の違う人がいる、感じ方の違う人がいる、宗教や民族の違う人がいる。その中で生きていかなければならないんだ。そのために必要な力が愛の実力。愛とは、考え方の違う人と一緒にやっていけるという理性より高度な力なんだ。それがこれからの我々がつくっていくアジアの時代においては、中心となる生き方の原理になってくるわけですね。考え方の違う人と共に生きることを矛盾を生きるといいます。理性は矛盾を排除しますから。考え方の違う人とはやっていけません。だけども、これからは考え方の違う人とも一緒にやっていかなければならないという現実がある。そのためには理性であってはいけないのだから、理性を超えた理屈を超えた愛が求められてくるわけであります。**

**とにかく、我々が愛に悩み、苦しむ状況にある第１番目の理由は、愛の理性化にあります。同じ考え方の人としか一緒にやっていけない、同じ考え方の人しか愛せない。相手が自分と同じように考えてくれないと一緒にやっていけないということですから、自分しか愛せない人間だ。それは偽物の愛だ。そんなものでどうして子孫が残せようか。その根拠をよく理解しておいてもらいたいと思います。**

**第２番目の現実の原因は、愛がまだ文化になっていない。**

**愛はまだまだ自然発生的な状況のまま放置されてしまっておって、愛は情緒・感情・本能・情熱という自然的な次元で放置されている。愛というものがまだ人間が人生を生きる力としての文化になっていない。なぜ、愛を文化にしなきゃならんのか。それは人間が文化をつくる動物と呼ばれていて、あらゆるものを文化たらしめることによって、人間はそれを使って生きるということができる、そういう状態になるわけであります。人間は文化をつくる動物だ。自然のまま生きることができない、文化・文明・歴史の中で生きるというのが人間的な生き方の基本原理であります。だから、愛も文化にしないと人間が生きる力に変えることができない。愛はまだまだ自然発生的な状況のままであるがゆえに、愛は感情と考えて、それに振り回されて現実を生きる力にしていないのが、現状です。これから我々は愛を文化にしていく努力をしていかなければなりません。**

**第３番目は、愛はまだ学問的に研究されたことがない。愛はもっぱら文学のテーマであって、文学の中ではさまざまなバリエーションが描き尽くされてきた。それが小説の中で語られれば語られるほど、人間は愛に迷うことになる。愛はもっぱら随想、随筆、散文という風な各文化人が自分の愛についての思いを語るというレベルのものしかない。愛についての学問的な研究は存在しません。これから我々は愛を学問的に研究していって、愛の本質と理念を理解して明確にすることで、愛を現実を生きる力に変えていく、愛に迷わないという状況をつくり出していくことをやっていかなければなりません。**

**最後の第４番目は、愛は能力だと考えられていない。愛は感情だ、情緒だ、本能だと考えられていて、能力だと考えられていない。では愛は本当はどんな能力なのか。冒頭で申し上げたように愛とは生む・育む・満たす能力。人間が最後に求めるものが愛なんですよ。金でも物でも名誉でも地位でもない、死ぬときに求めるのが愛なんです。愛されているということを命で感じながら死んでいきたい。それが命の究極の欲求であります。**

**とにかく、なぜ我々が愛に悩み、苦しむ状況にれられているのか、その学問的な根拠、原因が４つある。〈愛の理性化・愛が文化になっていない・愛が学問的に研究されていない・愛が能力と考えられていない。この４つが原因で、我々はまだ愛に悩む、苦しむという状況にあると。では、どうすれば悩み苦しむという状況から自分自身を救い出すことができるのか。どうすれば愛というものを、現実を生きる力に変えていくことができるのか。そのことを考えていく必要があります。**

**愛というものを人生を生きる力に変えていくにはどうしたらいいのか。第１番目は、愛というのは人間関係の力で、人間と人間を結びつける力ですから、人間とは何なのか、人間への深い理解が持てないと、愛の力を成長させることはできません。人間とは何なのか。人間の深い理解。愛の力を成長させていくために必要な人間への深い理解とは。それは２つあります。**

**１つは、人間の本質は心だということ。皆今の人達は自分の心を本当に満たしてくれるものを求めて生きているんだ。皆心が欲しいんだ。もう理屈はたくさん。理屈をやるとムカついてしまう。求めているのは理屈ではない、心だ。これがほとんどの人の叫びであります。自分の心を本当に満たしてくれるものはなかなか手に入らない。それにより人々は苛立ちを覚え、さまざまなストレスを抱えて、心の病になってしまう。まず人間への深い理解として愛の実力をつくっていくために、我々がわからなきゃならないのは、人間は誰でも皆心が欲しいという叫びを持っているんだということですね。だから我々は素晴らしい人間関係をつくっていこうと思ったら、皆心を欲しいと言っているんだから、心をあげなければならない。心をあげるとは何をあげることなのか。**

**それを知ることがまず人間への深い理解を持つ大事な課題であります。**

**心が欲しいとは何が欲しいのか。何をあげれば心の繋がりができ、心の結びつきができ、心の通い合いができ、心の絆が強固になっていくのか。まず人間への深い理解の中でまず第１番目に大事な大きな課題であります。それを考えるためには、まず人間は自分の心を本当に満たしてくれるものを求めて生きているんだと。だけども、人間は不完全だ。だから皆心を満たすものを求めて生きているんだけど、現実的には不完全だからその心が満たされることはない。だから、人間は誰でも皆、満たされない心を抱えて生きている心寂しき存在である。どんな人間の心の中にも「俺のことなんか、自分のことなんか本当には誰も分かってくれてない」という孤独な魂の叫びがどの人間にもあるんですよね。中にはそういう魂の叫びの存在を自覚できないで、のんきに生きてらっしゃる方もいらっしゃるかもしれませんけど、皆を笑わせながらひょうきんに生きている方でも、ふと一人になって自分の心の奥底を覗き見るならば、本当に自分自身で自分自身が可哀想になってしまうぐらいです。他人を笑わせて明るそうに生きているが、誰も自分のことをちゃんとわかってくれる人がいない…という孤独な自分に気付いて、自分で自分のために可哀想になって涙を流してしまいそうになるほどの孤独を本当は皆抱えているのが現実であります。**

**どんな人の心の中にも孤独の魂の叫びがある。うっかりすると自分だけが誰にもわかってもらえない、寂しさを抱えているという風に思ってしまう方もいらっしゃるんですけど、そうじゃなくてお父さんだって「子どもも女房もなんでわかってくれないんだ」という気持ちを抱えて、お母さんでもやっぱり「なんで主人も子どもも私のことを本当にちゃんとわかってくれないのか」。会社においても社員が「なんで社長は俺たちのことをわかってくれないんだ」と言っていますが、社長も社長で「なぜ社員は俺の辛さをわからないのか」という思いを持っている。皆、誰にもわかってもらえない孤独な魂の叫びを持って生きているのが、不完全な人間における偽らざる現実であります。**

**ではなぜ、誰にもわかってもらえない孤独な魂の叫びを持って生きざるを得ないのか。それは人間における実質的な本質は意志と愛である。感性論哲学では、人生は意志と愛のドラマ、と申し上げている。つまり、人間における実質的な原理は意志と愛。人間には愛がある、だから皆愛されたいと思っている。また人間には意志がある、だから皆認めてもらいたい、わかってもらいたい、褒めてもらいたいという心情を持って生きている。だけども、誰一人として自分が求めるようには愛してくれない、認めてくれない、わかってくれない、褒めてくれない。それが不完全なる人間社会の偽らざる現実だ。であるがゆえに、すべての人間は満たされない心を抱えて生きざるを得ない。このことから心が欲しいとは、一体何が欲しいのかがわかってくる。**

**心が欲しいとは、認めてもらいたい。肯定してもらいたい。分かってもらいたい。褒めてもらいたい。信じてもらいたい。待ってもらいたい。そして愛してもらいたい。心が欲しいということは、皆わかってもらいたいんだ。自分の気持ちをわかってもらいたい。そして認めてもらいたいんだ。だから、心の繋がりをつくろうと思ったら、我々は相手が求めているものをあげなければならない。まずは相手を認めてあげなければならない、褒めてあげなければならない、わかってあげなければならない、愛してあげなければならない。誰も否定されたくはない、注意されたくないんだ、叱られたくないんだ。これが人間の偽らざる心情、心の叫びだと言えます。心をあげるとはなんなのかをちゃんとわからないと、心の結びつき、心の絆を強固にする生き方はできません。人間への深い理解としてまずはそのことを頭に置いてもらいたいと思います。**

**それから人間への深い理解の２つ目として、「人間は誰でも長所半分、短所半分」であるということ。どんな人でも他人から非難されるところを半分は持っている。また、どんな落ちぶれた人でも他人よりも優れたところを半分は持っている。それが人間の現実なんだ。だから、どんなに落ちぶれた人と接する際も見下げるような、相手を軽蔑するような目で見てはならない。必ず相手にはこちらよりも優れた点が半分はある、それが偽らざる人間性の現実である。**

**また短所はなくならない。短所がなかったら人間ではないんだ。多くの人が相手の短所を非難して直させようとして相手に完全性を求めてしまいやすいんですけど、短所がなかったら人間ではない。あってこそ人間なんだ。人を愛するとは長所も短所も丸抱えで愛することだ。長所を愛せても短所は愛せないという人は、人間を人間として愛する資格がない。長く相手と付き合っていこうと思ったら、どうしても人間は相手の長所も短所も丸抱えで愛する気持ちがなかったらできません。ましてや夫婦であるならば、相手の長所も短所も肯定する自分をつくらないと、どこかで破綻します。どんな人間関係でも相手の短所を責める気持ちを持っていたら、どこかで壊れてしまいます。長く素晴らしい人間関係を続けていこうと思ったら、不完全な人間においては長所も短所も認める、受け入れる、愛せる力をつくっていかなければならない。長所は簡単に愛せてもなかなか短所は難しい。短所を愛する努力をすることで愛は芸術となる。恋は自然、愛は人間が努力してつくっていく文化である。文化の最高の姿は芸術だ。短所を愛する努力をすることで我々は愛を芸術にまで高めることができる。そのようにして素晴らしい人間関係をつくる実力が養われていきます。**

**愛というものの実践的な原理は努力なんですよ。相手のために努力する気が失せたら愛はなくなった。相手のために努力する気がある限り、愛は残っている。相手が自分のことをどの程度愛してくれているかを知るには、相手が自分ならどの程度の自己犠牲的努力を払ってくれるかを見れば愛の強弱がわかる。自分が相手のことをどの程度愛しているかは相手のためにどの程度の自己犠牲的努力を払う覚悟があるか、それを見ることによって自分の相手に対する愛のレベルがわかる。愛というものの実践的な原理は努力なんですよ。努力なしには愛は存在しない。短所を愛する努力が愛の力を成長させてくれて、愛を芸術の領域に高めることができる。**

**どうしたら我々は短所を愛することができるのか。どうしたら相手の短所を認めて、許すことができるのか。昔から「愛するということは、許すことなのね」と恋の名文句がありますね。では、何を許すことなのか。短所ですよ、それを許せて初めて人間への愛だ。人間を愛するとは短所を愛すること。どうしたら我々は相手の短所を許すことができるのか。そのことを考えて、その力をつくっていかないと人間を人間として愛することはできません。本当の人間愛というのは長所も短所も愛することなんだ。そのためにまずは何が大事なことかと言えば、短所がなければ人間ではないということをおさえること。短所があるだけでは人間ではない。それだけでは動物だ。自分の短所はなんなのかを知って初めて人間になることができる。なぜなら人間の本質は理性ではなく心だ。人間らしい心とは謙虚な心だ。人間らしい謙虚な心をつくってくれる原理は短所だ。短所がなくなってしまったら、人間が謙虚になる理由がなくなる。自分の短所をしっかりと自覚することで謙虚な心はつくられる。短所こそ、人間らしい血の通った温かな心をつくってくれる原理だ。短所の自覚を持たせることが人間をつくる第１原理であります。**

**だから、教育においては「君にはこういう短所があって、それが出ると他の人に嫌われちゃうから、あんまり出てこないように注意しようね」と言ってあげなければならないし、自分自身も短所が出てこないように気をつける気持ちがなかったら、人間ではない。うっかり出てきてしまったら、即座に謝る。竹を割ったような態度で過ちを謝することが大切です。人の短所を発見したら責めたらいかん。それを行うということは、相手に完全性を求めているということ。それは人間でない者になれと言っているのと同じ。人間なら短所は半分もあっていいんだ。人の短所を発見したら助けてあげよう、助けてあげたい、役に立ってあげたいと思うことが血の通った温かな心があることの証明なんだ。それをしない人に血の通った温かな心は微塵もない。現実にはさまざまな失敗もあり、失策もあって注意をしたり、叱ったりする必要がある。けれども、いきなり叱ってはいけない。まずは褒められたい、認めてもらいたい、わかってもらいたいと言っているんだから、その人の努力・やったことを認めてあげて、わかってあげて、その上で注意するところは注意をする。人間は心が欲しいのだから、まずはそうすることが最適。人の心を傷つけずにやる気を奪わない注意の仕方を人間への深い理解として考えていかなければなりません。今は理屈の時代ではなく、心の時代ですから。心を大事にした対応は非常に大切な課題ですので、叱る場合でもまず叱ってはいけない。認めてあげて、わかってあげて、認めてあげて。その次に叱って注意して、最後に褒めて終わる。一見、甘やかしているような気になるかもしれませんが、それが相手の心を傷つけない、愛を感じさせる叱り方なんですね。上司は自分のことを考えてくれているという思いになる、上司の愛を感じるような叱られ方があるわけですよ。心を大事にするとはそういう注意を払って人に接するということであります。人の短所を発見したら助けてあげよう、助けてあげたい、役に立ってあげたいと思うことが、血の通った温かな心があることの証明なんだということを心の片隅に持っておいてもらいたいと思います。**

**短所のもっとも大事な使い方というのは、自分の短所をさらけ出して相手に助けを求めて、助けてもらったら相手に感謝して褒め称えて、そして尊敬する…そういう力=活人力をつくっていく。相手の存在を輝かせる、相手の力を引き出してあげる。自分の短所をさらけ出す勇気が必要。助けてもらうことで人に仕事をさせる。仕事をしろというとなかなか嫌がりますが、助けてくれと力を持っている人に言うと、自分の得意なことなら機嫌良くやってくれる。そういった方法で部下に仕事をさせる。上司になればなるほど、昔から「実るほど頭を垂れる稲穂かな」という言葉があるように、地位が上がれば上がるほど自分の短所をさらけ出して、部下が増えてくるんだから、ほとんどの仕事を部下にやってもらう。それによって相手の能力を引き出してあげて、相手を褒め称えて、ますます上司のために仕事をする人間に育てていく…そういう関係性ですね。**

**活人力を持つためには、上司は部下に自分の短所をさらけ出して、部下に仕事をしてもらう。そういう人使いの仕方を覚えていかないとこころの時代の指導者にはなれません。命令して人に仕事をさせているのは理性的な仕事のさせ方。助けてもらうというやり方で仕事をさせる方法をもっと大事にしていく必要があります。人を助けてあげることも大事なんだけど、人に助けてもらうことも同等の価値がある、素晴らしい行為だ。これまでは人に助けてもらうのは借りができるようで嫌だと感じる人が多かったんですけど、これからはそうではない。助けてもらうことによって相手の存在を輝かせて、相手を成長させてあげる。そういう部下の育成の仕方があるんだということをわかって、人に助けてもらうことも立派な能力、仕事の仕方ということを忘れてはならない。人を助けてあげることも人に助けてもらうことも同等の価値がある、素晴らしい行為だ。助けてあげるばかりじゃ相手を惨めにする。助けてあげて、助けてもらって、初めてバランスが取れる。助けてもらって、相手を褒め称えて、尊敬して恩を感じて、感謝することによって、初めて心の繋がりができていく。理性の時代のように支配と命令と管理というやり方で仕事をさせている間は、心の繋がりはできません。心の繋がりをつくるためには、愛と対話とパートナーシップが必要。そういう新しい経営手法が求められてくるわけであります。**

**愛と対話とパートナーシップ、これは心の繋がりを基礎にした仕事の仕方、させ方であります。会社でもなかなか長所が出てこない人がいて、短所ばかりが目立つ人もいらっしゃることが多々あるかと思いますが、それはまだ長所が伸びていないから。長所が伸びてくると短所は気にならなくなる。そのまま長所が伸びて、他人から一目置かれるようになると、短所は何もしなくても人間の味、人間味に変わる。「あんな凄い力を持っているのにこんなところもあって面白いね」「なんか親しみを感じるよね」と、そういうところに変わってくるのが短所。長所を伸ばせば人間味になってくる。短所が目立つのは、まだ長所が伸びていないから。短所が目立つようならその人の長所を発見してあげて、伸ばしてあげて、それを他人から一目置かれるような力に成長させてあげる。そういう社員教育をしなければならない。そうすると、短所は自然に人間の味に変わってくる。これを感性論哲学では角熟と言います。**

**角ばったまんま、そのまんま東で熟していく。円熟では真ん丸になってしまうから、個性がなくなる。人間は皆個性がある。個性のある人間が目指す完成形は、円熟ではない、角ばったまんまの角熟だ。角熟というのが、長所も短所も活かしきった人間の完成された姿であります。とにかく、まずは長所を伸ばさないといけない。長所が伸びてくると短所は気にならなくなる。短所は人間味に変わる。素晴らしい力を持ちながらも人間味を失わないためには、短所の存在が必要なんだとも言えるわけであります。**

**では、なぜ人間には長所も短所も半分ずつあるのか。そういう人間観が成り立つのか。その根拠もちゃんとしないと言い訳が出来なくなってしまいますから。それを説明することもちゃんとできなきゃなりません。そのためには、人間というものも大宇宙を形成する１つの命なんですね。宇宙は我々の外にあるんじゃない、我々自身が大宇宙の一部なんだ。宇宙とはプラスとマイナスのエネルギーが半分ずつあって、それぞれがエネルギーバランスを模索しながら、宇宙の秩序をつくっているのが宇宙の摂理と言われる現象であります。エネルギーバランス=宇宙の摂理の力。バランスを取ろうと思ったら、必ず相対立する原理がある。しかし、それらが協力し合って働くことによってバランスというものが形成されている。それを考えると、宇宙というのは一対の対存在といって、すべてのものが対を成して存在する構造になっています。だから、プラスにはマイナスがある。陰には陽があるし、また光には影があるし、善には悪があるし、美には醜があるし、真には偽があるし、清には濁があるし、男には女、動物には植物、全部一対という対構造で宇宙は出来上がっている。それぞれが宇宙の秩序を崩壊しないように働いているというのが、現実の宇宙の中に存在する姿であります。**

**人間も自分でつくったものではなく、宇宙の力によってつくられたものです。それを与えられて我々は生きているわけです。人間の命も宇宙の摂理によってつくり出された存在なんだ。その人間に長所と短所があるということは原理的にいって、長所も短所も半分ずつあるんだと考えなければならない。だからこそ、あらゆるものが一対という対構造になっているんだ。だからこそ、長所も短所も半分ずつあるんだと言えます。長所も短所も活かして使いこなしていかなければ、宇宙の摂理に合った生き方をすることはできない。長所も短所も活かさなければならない。短所を活かすことによって我々は人を愛することができるようになる。人を愛するとは長所も短所も愛さなければならない。長所を愛せても短所は愛せないという人は、人間を人間として愛する資格がない。人を愛するとは長所も短所も丸抱えで愛することだ。これからの時代を生きる新しい愛の原理をわきまえないと、本当の素晴らしい人間関係をつくり、維持する力を我々は持つことができません。とにかく、人間への深い理解というのは２つあって、１つは人間は誰でも心が欲しいんだ。だから、心をあげなければ心の絆はつくれない。まずちゃんとわかることですね。２つ目は人間は長所と短所半分ずつ。人を愛するとは長所も短所も丸抱えで愛すること。短所も愛することで我々は素晴らしい人間関係を構築していく実力を自分のものにすることができる。短所を愛するとは短所を認めて許すこと。短所を活かして使うこと。そのことによって愛は奇跡を生むような能力となり得る。**

**その次、第６番目ですね「理性能力の限界を知って謙虚になる」。とにかく近代は理性の時代と言われて理性しか信じることができる能力はない、そういう確信に基づいて、理性を信じて生きてきました。だけどその結果としてどういうことになったのか。自然破壊、環境破壊、人間性の破壊の問題が出てきてしまった。人間性の破壊の中には、離婚の激増、幼児への虐待、高齢者への虐待がある。そして人間から血の通った温かな心を奪うことによって、宗教の違いで殺し合う、民族の違いで対立する…そういう状況が世界につくられてきたわけであります。これが理性を信じて生きてきた人間の結末、現状なんですね。その問題が出てくることによって、ようやく人類は本当にこれからも理性を信じて生きていってもいいのか、という反省が今出てきているという状況なんですね。ようやく人類は理性からの盲信から目覚め始めるという状況になってきております。理性への絶対的信頼が揺らぎ始めたという状態なんですね。これには学問的にいろいろプロセスというか、理性というものを批判しながら新しい時代をつくって、新しい原理である感性を原理にして生きる時代になっていく流れが、思想的にあるわけですけどね。**

**まずその理性批判として実存哲学というものが出てきて、理性批判を展開しました。19世紀から始まった哲学ですけど、フリードリヒ・ニーチェとかセーレン・キルケゴールとかですね。そういう方々が19世紀に実存主義というものを確立して、20世紀になってからはカール・ヤスパース、マルティン・ハイデッガー、ジャン=ポール・サルトルという大哲学者が理性批判の哲学を展開しました。その中で、19世紀末から20世紀初頭にかけてジークムント・フロイトが理性による命の支配というものが、精神病の原因であり、またあらゆる内臓の病気をつくり出す原因だと、解明しました。1931年にはクルト・ゲーデルという数学者が「理性の不完全性定理」という論文を書いて、理性と能力が完全無欠のロックンローラーではなく、不完全なものだと数学的な手法で証明したわけです。数学的と言っても数字を使ったのではなく、記号論理学という論理実証主義という形で論文を書いて、理性の不完全性を証明しました。1950年代にはフランスの大哲学者であるアンリ・ベルクソンが「時間と自由」という本の中で、理性という能力は生きているまま殺す力だと、激しい理性批判を展開しました。当時は激しい言葉でなかなかのにわかには信じられないような状況でしたけど、今や現実となり、人間が理性化されることによって自分と違う存在、考え方の違うことを許せないという状況で、異なるものを抹殺しようとする行動が全世界で行われているわけであります。**

**ベルクソンが、理性という能力は生きているまま殺す力だと言ったのはどういうことなのか。理性によって認識されたものは固定化されて変化しなくなってしまう。変化しないというのは、死んでいるのと同様。生きているのは変化をすること。だから、理性によって認識されたものはすべて変化しなくなってしまう。であるがゆえに理性は、生きたものから命を奪うと言える。それが今や、人類の世界の現実となって、理性によって殺し合っている…という状況が多々見られるわけであります。夫婦の関係も離婚の激増ではなくて、ちょっとした違いも抹殺しようとすることもあります。幼児への虐待も子どもを殺してしまうことになりかねない。理性ゆえにいろんな事件で違いを理由にしてしょっちゅう起こっているわけですね。理性能力の限界というか、本当に正しいのかを原点にかえって問わなければならない。**

**では、我々はこれから理性能力というものをどういう風に考えていったら良いのか。これまでは理性という能力は合理的に考えることができる素晴らしい能力だと言ってきたんですけど、そして、理性しか信じることができるものはないと。理性を原理にしていろんなことをやってきた。今や理性の問題点、限界が見えてきた。そこで我々はこれから理性能力というものをどう考えていったら良いのか。どうしたら理性に支配されないで、人間が理性を支配するようにできるのか。理性を使いこなして、どうしたら人間的に生きることができるのか。これまでは人間でありながら、理性的になることを目標にしてきた。本当の人間は理性的になることではない、本当の人間の目標は、人間的な人間になること。そのためには、どうしたら理性を支配することができるのか。そのことをこれから考えていかないと、理性の次の新しい時代をつくっていくことはできません。そのために原点にかえってみるとどうなるか。**

**理性能力は、生まれたときには存在しない。赤ちゃんは考えられません。考えるということができるためには、人間には生まれながらに140億個という脳細胞がある。脳があっても考えることはできない。脳は肉体であり、精神ではない。脳という肉体が考えるという力を持つためには、どういう順序が必要なのか。脳が人間がつくった言葉を覚える。言葉と言葉とを事実に合うように結びつけていくと、合理的に考えるという力が出てくるんですね。これが理性だ。理性というのは言葉と言葉とを結びつけて出てくる能力だから、理性能力は言葉が持つ限界を背負っているということになる。これを我々は認めなければならない。**

**言葉の持つ限界とはなんなのか。言葉では表現し尽くし得ないものがある=実態。言葉は抽象概念である。抽象概念は実態から遠ざかったものだ。だから、言葉をどれだけ駆使しても、実態は掴めない。本当に我々は実態を掴もうと思ったならば、考えることをやめて、言葉をやめて、肉体を動かして、肉体的な体験を通して掴んだ感性的実感が、真実という実態を理解する方法である。だから、瞑想とか座禅というのは、まず考えるなと言いますよね。考えると言葉が出てくる。言葉は抽象概念だから実態から遠ざかる。実態が分からなくなってしまう。本当に我々は物事の実態を知ろうと思ったら、まず行動しなければならない。体験しなければならない、体験から掴んだ感性的実感が真実だ。それが悟りなんですね。悟りとは気付き、頭での理解ではない。理性というのは、言葉と言葉とを結びつけます。言葉は抽象概念です。つまり、抽象概念と抽象概念を結びつけて考えるということは、実態から遠ざかるような考え方になってしまう。そういう意味で理性というのは、実態を掴むことができない不完全な、有限な、限りがある能力だと、これからは考えなければなりません。理性というのは、合理的にしか考えることができない、不完全な、有限な、限りがある能力だと、考えなければなりません。それがこれからの理性に対する認識、概念であります。これを理性革命と言います。理性に対する意識革命を我々はこれからしなければならない。**

**もう１つ、理性が不完全だと言える理由は、理性で考えたことはどんな立派な人が考えたことでも、すべて偏見となってしまう。どんな人の意見も偏見と言うことができる。人間は肉体を持っていますから、持っている限り、その肉体がある場所からしか物を見ることができないし、その場所でしか考えられないし、その場所でしか判断もできない、という限界がある。偏見というのは、決して間違っているということではない。正しいけれども偏りがあるということ。偏見というのは間違いじゃない。これがよく誤解されやすいんですけども、「君の考え方は偏見だよ」と言われると、間違っていると言われているような意識になる人もいると思うんですけど、偏見は正しいんだ。けど歪みがある、偏りがある。そういう意味でも理性というのは、完全な正しさというのを主張できるような能力ではない。**

**よく我々は、科学的真理は正しいんだと思ってしまいますが、これも偏見なんですよ。客観的に見たら、こういう風に捉えることができると言うのが科学的真理というものの姿であります。だけどその科学的真理というものを持って自然に対応すれば、自然破壊が起こる。それはなぜか。物理学というのは現実のさまざまな現象の中の物理的現象しか問題にしていない。物理的現象の範囲内ではこういうことが言えるというのが物理法則であります。だけどこの物理法則が化学の法則とどう関係してるのか、また生物学の法則とどう関係しているのか、また心理学とどう関係しているのかを全然問題にしていない。ただ物理学の範囲ではこんなことが言えるということだけですね。科学的心理というものの姿であります。科学は大自然をぶった切って、部分だけしか研究しない。全体的にどうその真理が関係しているのかを問わないし、問題にしない。現実とはすべてのものが有機的に絡み合って動いているんだ。つまり、現実は有機的に絡み合っている相乗効果の世界なんだ。だけど、科学というのは現実をぶった切って部分的にしか研究しない。科学的真理というのは、その範囲、その範囲では正しいのだけれど、現実的には世界の有機性を破壊する。それにより自然破壊、環境破壊が起こる…これが理性の限界なんです。理性が信頼に値しない能力だということを証明する根拠というのはいろいろと出てきます。そういうことを通して我々は、理性は決して完全無欠のロックンロールではない。合理的にしか考えられない、有限で不完全な能力なんだ。そういう不完全な理性をどういう風に我々が使いこなして、どう支配して、使いこなして人間が幸せに暮らしていくのは、どうしたら良いか。そのことを考えていかなければなりません。**

**実存哲学からフロイト、クルト・ゲーデル、ベルクソン…そういう流れで理性能力というのは絶対的信頼から揺らぎ、崩れていきました。今や理性は人間の本質ではない。そういう人間観ができているわけであります。**

**後半の話に入ります。**

**理性の限界を申しましたが、人間が理性に支配されないためにはどうしたらいいのか。理性能力は脳に限定された能力なんですね。理性能力は人間が持っている能力の１つに過ぎない。理性能力は人間全体の部分ですから、だから部分が全体を支配してはならない。全体が部分を支配する。そういう形に持っていかなければならないということですね。先ほどは理性は合理的にしか考えることができない有限で不完全な能力だという風に申しましたが、それは理性に対するマイナスの評価なんですよ。理性に対するプラスの評価とは、本当のことも言えるんだけども、嘘も言えるという面があります。本当のことを言うことは、事実に合ったことを言うこと。嘘を言うことは事実でないことを言うこと。嘘を言うことに理性能力の積極的な価値があります。それはどういうことなのか。事実というのは、現在と過去しかない。事実を言うことが真理ということになるわけですね。**

**だけども、理性は50%は嘘を言うことができる力を持っている。事実ではないことを言うことができるというのは、なんなのかと言ったら、理性能力は50%は事実に支配・拘束されていないところがあるということ。それによって何ができるのかと言うと、まだ事実になっていない未来に対応できるということ。未来は事実ではない。嘘が言えるという能力は、理性能力において未来を語ることに関係する。**

**未来とはなんなのか。人間にとって未来とは理想であり、夢であり、希望であり、目標である。理想とはなんなのか。理想とは、絶対にこうだということではなくて、今よりも素晴らしいことを言う。理性能力は、絶対にこうだという力はないけれども、今よりも素晴らしいことを考えることができる。そこに理性能力の積極的な価値があるんだ。理性は今よりも素晴らしいことを考えることができる。そういう力を持っているがゆえに、人類は文明・文化・歴史をつくる動物になった。過去を振り返ってみれば、理性能力が絶対にこうだと言うことはできない、より良いことを考えることができる力を持っていると。それを証明するのは、人類は文明・文化・歴史をつくってきた事実なんですね。理性は今よりも素晴らしいことを考えることに使っていく必要があると認識しなければならない。**

**そのために考えなくてならないことは、自分の考えはどんな考えでも偏見なんだと。どんな立派な人の考えでも理性的な結論は偏見なんだ。その理性をより良いことを考えるために使うとは、どういうことなのかと言ったら、アジアにおいて仏教の悟りとして言われている、「三人寄れば文殊の知恵」という言葉なんですね。一人一人の考えは偏見だけども、３つの違った考えを統合して結びつけることによって、人間は仏の知恵に近づくことができる。これがより良いことを考える手法であります。とにかく理性に支配されるというところから脱却していくためには、自分の考えはどんな立派な考えでも、すべて偏見なんだということを忘れてはならない。だから私が今話していることも偏見なんですよ。感性ということを原理にすれば、こういう風に考えることができる、こういう判断ができる、と申し上げているわけであって、理性を原理にして考えたり、物質を原理にして考えていたり、違ったものを原理にして考えれば違った結論が出てくるんですよ。私の話していることも感性という原理に偏った考え方であります。**

**なぜ、感性論哲学を語らなければならないのか。それは歴史、時代というものが、理性という時代が終わって、感性・心の時代が始まる。そういう精神史的流れがある。しかも、哲学は時代が変われば哲学も変わるんだ。また哲学によって新しい時代がつくられていく。そういう関係性にある。であるがゆえに理性の時代は終わったのだから、我々は理性的な考え方を乗り越えて、さらに高度な考え方に進んでいかなければ、より素晴らしい歴史をつくることはできない。そこでこれからの、理性とは違う新しい文明の原理はなんなのか。それが感性である。これからの時代は、偏った考え方であるけれども感性を原理にして文明・文化・歴史をつくっていく。これから何百年間は感性を原理にした感性論哲学を学ばないと、これからの時代を生きる力を自分のものにしていくことはできない。感性論哲学は偏見なんだけど、この時代においては必要である。やがて時代が変われば、感性論哲学は否定をされて、また新しい時代に合った哲学が生まれてくる。限界付きのものなんですけど、今の時代を生きるためには、我々は理屈を超えた感性というものを原理にした生き方や仕事の仕方を学んでいかなければならない。**

**それを現実的に考えていったらどうなるか。どんな人の考えも偏見なんだ。３つの違った考えを結びつけることによって、我々は偏見を乗り越えて、より真実に近い考え方に到達することができる、これが仏教における「三人寄れば文殊の知恵」という言葉なんですよ。なぜ３人なのか言ったら、人間の社会は１人称２人称３人称という構造になっており、４人称はない。すなわち生きた現実の社会というのは、３つの考えを統合することによって生きた現実に近づくことができる、そういう構造になっておるんだということなんですよ。だから自分の考えは偏見なんだけど、３つの違った考えを統合すれば、生きた現実に近づくことができる。それにより偏見を乗り越えていって、自分の考え方の偏りを修正することができる。それが理性を支配して、理性を使いこなして、人間が生きていくというやり方なんですよね。**

**今は統合の時代なんだ。そのことを考えたならば、我々は自分の考えを持ったならば、その次に必ず自分とは違う２つの考え方を無理矢理でも探して、そして自分の考えとあと２つの違う考えを自分の中で統合して、ガッチャマンして統合して、そして自分の考え方の偏りを修正して、そしてより現実に近い、真実に近い考え方に近づいていく。理性を手段能力に使いながら、人間的に生きるということなんです。なぜ、人間的に生きることになるのか。３つの違った考え方を統合することによって、我々は考え方の違いによる対立から脱却できる。そして、本当に平和な世界をつくることができる力を持つことができる。**

**違った考え方を持っている夫婦がお互いに統合という関係性で結び合って、お互いに偏見を乗り越えて、そしてより真実に近い考え方にお互いが近づける。パートナーシップというそういう関係性を築くことができる。これがより良いことを考える理性能力を使って、理性的に生きるんじゃなくて人間的に生きる力を自分のものにしていくやり方であります。**

**もう１つ人間が理性を支配するやり方として考えなくてはならないことは、理性能力は客観性と普遍性の能力と言われていて、物事を客観的に外から眺めてみる立場を理性に与えてあげないと、理性は正しい答えを出せない、そういう限界がある能力なんですね。普遍性というのは、皆に共通するということですので、皆の事を考えるというね、そういう力。理性能力は手段能力なんですね。これを人間が使いこなして、人間的な生き方をすることができる。**

**どういうことなのかと言ったら、人生にはさまざまな問題があるわけなんですけども、悩みながら考えると、悩みのドツボにはまってしまって、考えても考えてもなかなか結論が出ない。考えれば考えるほどますます蟻地獄のような苦しみに入ってしまう。悩みながら考えた場合の結果であります。**

**悩みながら考えると悲観的になっていますから、「こんなことしたらあの人に迷惑かかるしな。そんなことしたら隠しておきたいことがわかってしまう」「どうしようもないな」となってしまう。悩みながら考えると何をしても全部マイナスの要因ばかり出てきてしまって、「もうなんともならん。もう俺が死ぬしかない」となってしまいます。そして友人に相談すると、まぁ「死ね」という友人はいませんから、「まぁ、待て」ということになる。「死ぬ気になったら何でもできる」というのが友人の言葉なんですね。自分のことなら死ぬほどの問題でも、友人は自分の問題ではなく相手の問題を聞いているわけですから、外から見るという立場なんですね。それにより、悲観的な状態から脱却できる。距離感がある、それを客観性というんですね。物事を客観的に眺めてみることによって、初めて理性は結論を出すことができる能力なんですね。**

**もっと具体的な例を出すとすると、例えば、深い森の中に迷い込んでしまったとする。森の中に迷い混んでしまった人間が、迷いながら進んで行ったら、その森から早く出られるかと考えても、迷いながらでは答えは出ません。あっちに行ってみようか、こっちに行ってみようかとやっている間に野垂れ死にしてしまうのがオチ。どうしたら答えが出るのかと言ったら、深い森に迷ってしまった場合には、森の中に生えている一番高い木のてっぺんに登って、そこから森全体を外から眺めるならば、出口までの道筋が一発でわかる。これが物事を客観的に外から眺めてみれば答えが出るというやり方なんですね。実際は森の中の一番高い木を探しているだけでも死ぬのでは!? という意見もあったり、またそんな高い木を登ることができるのか!? という意見もありますが、それは横に置いておいて。これが理性を支配して、正しい答えを出す方法論なんですよ。**

**一般的な生活に落とし込んだらどうなるかと言うと、どんな悩みでも問題でも悩みながら考えたらいかん。では、どうするか。これは俺の問題ではなく、他人の問題として、他人から自分に相談されたらどうするかを考える。そうすると、すべて自分の力で乗り越えられる。夫婦・親子・子ども・会社の問題でも、自分の問題としたら切羽詰まってしまうが、他人事にしてしまう。自分に相談されたらどうやって言うだろうと。そうすると、必ずどんな問題でも抜け出せる道・答えが見えてくる。これが物事を客観的に眺めてみる方法で理性を使って、人間的に生きるやり方であります。週刊誌に書いてある芸能人の悩みなんかでも、本人は身も細るほどに悩んでいるんですけど、それを読む奥様方はちょっと読みかじっただけで、「こんなことはこうすればいいのにね」と一発で正しい答えに辿り着く。それほどに、他人の問題はよく見えるんですよ。自分事だと、「こんなことしたらあの人に迷惑かかるしな。そんなことしたら隠しておきたいことがわかってしまう」「どうしようもないな」となってしまい、答えが全然出てこないということになってしまう。とにかく、どんな問題でも他人事にして、相談されたらどう答えるかを考える。**

**この方法を知ってるのと知らんとでは人生大違いですよ。この方法を知らないと、うっかりすると悩み悩んで、細木数子さんのところに行っちゃったり、うまくアドバイスを受けたとしても、その人は一生他人に頼らなければ生きていけないような依頼心と依存心がある弱い人間になってしまう。本当に現実を力強く生きていこうと思ったならば、必ずどんな問題でも他人ごとにするこのやり方を覚えないといけません。これが理性が客観性と普遍性の能力であるということを使いこなして、人間が理性を使って支配して、人間らしく生きるという力をつくっていく方法論です。**

**また理性能力は皆のことを考えるという普遍性の能力ということも申しましたが、それはどういうことなのか。人間が最も大事なのは、自分自身の欲求・欲望・興味・関心・好奇心、本音と実感…本当の俺というものを大事にする必要があります。本当の俺は欲求です。欲求は個人的なもの。だから個人的な欲求をそのまま社会に表現したのでは、他人とぶつかる。人間が幸せになるためには、どうしても自分のしたいことをしなければならない。だけどそうすると他人とぶつかる…そこで大事なことは、理性で皆のことを考えて、自分のしたいことをしながらも、皆に喜んでもらえる方法はないだろうかと考える。これが理性という能力を人間が支配して、人間的に生きる道をつくっていくというやり方なんですよ。理性能力は皆のことを考えるという普遍性の能力。理性で皆のことを考えて、自分のしたいことをしながらも、皆に喜んでもらえる・役に立つ方法はないだろうかと考える。これが理性という能力を人間が支配して、社会に受け入れられて、皆に喜んでもらえて・役に立って生きていける道が拓けてくるわけであります。**

**覚えてもらいたいのは、理性は客観性と普遍性の能力だ。とにかく、どんな問題でも他人事にしないと、人生は乗り越えていけない。悩みながら考えると、悩みのドツボにはまってしまって、考えても考えてもなかなか結論が出ない。それでは理性能力は活かされない。他人から相談され、その場合はどう答えるかを考える。一度で解決することは難しいですから、相談された場合にこう答えるだろうということをやってみる。やってみたら状況が変わる。その状態でまた他人事で考える。それを続けると必ず問題を乗り越えることができる答えに到達することができる。これが、より良いことを考えることに理性能力を使った生き方です。人生において忘れてはならない、理性を支配する生き方なんです。**

**普遍性では、理性で皆のことを考えて、自分のしたいことをしながらも、皆に喜んでもらえる方法はないだろうかと考える。自分のしたいことをセントバーナード、人間はしたいことをセントバーナード、自分のしたいことをしないと自分の人生をつくれない。自分のしたいことをしながらも、他人とぶつからない。他人に喜んでもらえるという生き方をしていかないと、社会は生きづらいですからね。だから自分のしたいことをしながらも、皆に喜んでもらって、皆の役に立つ…そういうやり方はないだろうかと考えるための手段能力として、理性を使う。**

**実際問題、職業というのは、そういうやり方でつくられてきた活動なんですよ。職業において成功しようと思ったら自分のしたいことをしなきゃならない。したくないようなことをして成功はできない。自分のしたいことをしながらも、しかも自分が利益を貪るんじゃなくて、皆の役に立って皆に喜んでもらえるという、そんな方法はないだろうかと考える。そのことによって社会的に価値ある職業というのは生まれてきたわけであります。職業というのは、そういう理性の使い方でできたものです。そういうことを考えても、我々は自分の仕事をしながらも、皆に認められて、そして幸福になっていく。理性能力を皆のことを考える力として使っていくという使い方を我々は知る必要がある。**

**その使い方を知らず、うっかりすると自分の欲望を実現するために理性を使ってしまって、理性が欲望の奴隷となって、結果として悪賢い人間ができてしまうこともある。多くの経済人が悪賢さに理性を使ってしまって、経済犯罪に絡んでしまうような失敗をしてしまうことがあるわけであります。そうならないように、正しい理性の使い方を忘れないでおいてもらいたい。決して理性を欲望の奴隷にしてはならない。そうすると、反社会的な生き方になってしまって、人間性を失ってしまう。とにかく、早く自分自身を理性の支配から解放して、ストレスのない問題や悩みにつぶされずに乗り越えていき、自分の人生を自分で生き抜いていくために、理性能力の正しい使い方を理解してもらいたいと思います。**

**次の素晴らしい人間関係をつくる愛の実力のつくり方ですが、「対立を乗り越える力」。多くの人が対立ということを通して、どちらが勝つか負けるかという勝ち負けに持っていってしまう場合が非常に多いんですよね。これまでの人類の対立という問題に対する対応の仕方は、５つしかなかったんですね。これまで人類が対立という状況が出てくるとどうしてきたか。まずは説得をして、自分の考えで相手の考えを論破して、そして自分の考えで相手を説得して、自分の考えに従わせるようなことをやってみる。説得もできなければ妥協点を模索する。妥協もできなかったら今度は相手が強いと思ったら媚びへつらう。媚びへつらうことも気にそぐわなければ、逃げるという。そういうことで対立から遠ざかるという、逃げるということをする。国際的には鎖国的な状態になってしまう。それもダメなら最終的には喧嘩や、戦争や、となってしまうというのが、これまでの対立という状況に対して人類がとってきた対応方法なんですね。**

**いずれも結果として、勝ち負けを争うような低次元の対応の仕方であったわけであります。だけども、これからの世界の在り方を考えると、勝って負けるものをつくってしまうと、負けたものの悲惨さも勝ったものに大きな影響を与えるという状態になりやすい。特に国際的なグローバル化した世界においては、負けた国の悲惨さが、勝った国にも大きな影響を与える。それを考えた場合、これからの我々の対立の対処方法は、新たな高次元の対応の仕方を考えねばなりません。**

**対立を乗り越えて、愛の実力をつくっていくとは、どういうことをするのか。対立を乗り越えようと思ったのなら、まずは対立とはなんなのかを知る必要がある。対立はなぜ生じるのか。生まれながらに対立して生まれてくる人はいませんから、対立は後天的なもの。その原因は考え方が違うということなんですが、その考え方もなぜ違ってくるのか。そこには５つの原因があります。**

**まず、体験が違うと考え方が違ってくる。また経験が違うと考え方が違ってくる。また持っている知識や情報が違うと考え方が違ってくる。それから物事の解釈の仕方が違うと考え方が違ってくる。それから最後の５つ目はさまざまな人生の出会いの違いというものも考え方の違いをつくり出す原因であります。どういう災害と出会ったか、どういう事件と出会ったか、どういう事故と出会ったか、どういう人物と出会ったか、どういう本と出会ったかなど、出会いの違いも考え方に違いが出てきます。〈体験・経験・知識と情報・解釈・出会い〉この５つが考え方や価値観の違いをつくり出す原因になるわけですね。体験と経験は英語で言えば、両方ともエクスピアリンスで一緒なんですけど、日本語で言う場合は体験と経験は次元が違います。体験というのは自分の肉体が外の世界と関わった事実のこと。経験というのはその体験から自分が何を学びとったか。とにかく、５つの原因によって考え方や価値観が違ってくる。そのことによって対立が生じる。**

**ここで考えなければならないことは、同じ考え方の人間と付き合っていたら、楽しいし、愉快だし、気楽で良いんだけど、成長はしない。同じ考え方とばっかり付き合っていたのでは成長しない。成長しようと思ったら自分にないものを持っている人と付き合って、自分にないものを相手から学ぶ努力をする必要がある。この成長の原理を考えた場合、対立というのは自分にない体験を相手が持っているから対立する。自分にはない知識と情報を相手は持っているから対立するんだ。人間が成長するためには自分にないものを相手から学ばなければならない、と考えれば、対立とは、自分が成長するために学ばなければならないものを持っている人間が、今自分の目の前にいるんだということを教えてくれるもの。対立とは、自分が学び取らなければならないものを持っている人間が誰かを教えてくれるもの。**

**こういう理解をすることで我々は、対立相手を敵として見るのではなく、「この人から何かを学び取らなければならない」という意識になっていく。そのことによって、相手を見る目が違ってくる。敵として見るのではなく、何かを教えてもらおうとする目になる。この目の変化が、相手の対応すらも変えてしまいます。これにより、人間関係は目で決まると言うことができます。どういう人を見るかで、その人との人間関係が決まる。相手を敵として見ている状況では、良い人間関係はつくれません。相手から何かを学び取らなければならないという目になった場合、目の色がガラッと変わる。その目の色の変化に相手は感応して、こちらに対する態度を変えてくれる。これが人間関係が激変していく原理・キッカケになります。これは何事にも通じる大事な問題なんですね。**

**対立を避けるのではなく、向かっていって、対立をしながらも相手から何か学び取れるものはないかと、相手の言うことを聞き始める。激論の最中、そう言われてみると確かにと思うことがある…そうして自分の問題点に気付く。そして、「今日は君と出会えて良かった。この話ができて良かった」となり、「自分はこれだけ成長できた。ありがとう」と言い、相手に御礼を言うことができる。愛するとは学ぶこと。相手から学ぼうとしないのは愛がないんだ。そういうことがわかってくると、我々は対立を勝ち負けに持っていかず、対立を通して自分を成長させて、相手との人間関係を修正して、相手との間に良い人間関係をつくっていくことも可能になる。夫婦喧嘩でも同様、最初はいろいろと言われてムカつくんですけど、だんだん言い合っていると、納得する部分、気付きが生まれてくる。気持ちの大きさ、ゆとりが出来上がってくる。対立から何かを学び取るというのも愛の実践なんですね。**

**相手から学ぶということは、相手のことを知ることになります。だから、相手も自分のことをわかってもらって喜ぶわけです。そうしてだんだんお互いがお互いをわかり合って、違う考え方なんだけど、助け合って友情が生まれることになっていきます。相手の長所は使わせてもらう、相手の短所は助けてあげよう。それにより、パートナーシップが出来上がってくる。対立を乗り越える実力というのは、対立に対する新しい理解の仕方が根底になければならない。→対立とは、自分が学び取らなければならないものを持っている人間が誰かを教えてくれるもの。この解釈は、これまでの哲学や思想にはなかった。対立から学び取って成長していくやり方は、明らかにこれから世界を平和に導いていくための新しい対立解釈だと言うことができます。**

**現実にあるあらゆる対立、人間関係の問題を乗り越えるには、その根本原理である愛の力が欠かせない。それを成長させなければならない。それを考える上で非常に大事な言葉があります。第二次世界大戦後、国連でUNESCOがつくられ、UNESCO憲章というものがありますが、その書き出しの言葉が、我々が愛や平和を考える上で大事なものになるはずです。「戦争は人間の心の中から始まるのである。だから、人間の心の中に平和の砦を築かなければならない」。憎しみも恨みも心の中で湧き出てくる心情。これは名言中の名言です。家庭の平和、組織の平和、世界の平和を考える上でもっとも大事な根本の原理になる大事な言葉だと思います。核兵器をなくしたくらいで戦争はなくなりません。武器をなくしても戦争はなくならない。人間は殴り合いで戦争をします。本当に人間同士が仲良く生きていこうと思ったら、一人ひとりが心の中に平和の砦を築くしかない。その平和の砦こそ、まさに愛。その愛の中でももっとも切実な力となり、実力となる愛の原理こそ、対立は自分が学び取らなければならないものを持っている人間が誰かを教えてくれる現象だ。**

**とにかく、ここでよくわかってもらいたいことは、人間関係は目で決まるということ。どういう目で相手を見るか。そのことによって、人間関係は99%決まる。相手を見る目の在り方を変えれば、あっという間に人間関係は激変する。敵対している目から好きだという目に変えれば、たちまちにして人間関係は激変して良くなる。そういう意味では人間は人間に惚れなければならない。人が好きだという目を持つ必要がある。感性論哲学では、「いつも目に愛の光を」と教えています。やはり、人と会ったら相手の嫌なところが見えてきてしまう人間になってはいけない。良いところが見える人間にならなければならない。どんな人にも良いところが半分はあるんだ。相手の良いところが見えてこないということは、相手の責任ではなくてこちらの人間性の狭さ、未熟さによるもの。こちらが人間的に成長をすれば、50%は良いところなのだから、少しは見えてくるはず。人と付き合うときには短所は50%もあって良いんですから、あまり気にしないで良いところに着目して、長所と付き合わせてもらうことを覚えないと、なかなか人間関係は難しいです。人間を愛するということは、長所も短所も丸抱えなんだ。対立を通して、自分が学び取らなければならない。無理矢理にでも口にする「あなたからこれを学びました。今日は出会えて良かった。ありがとう」と相手に感謝する。そういう言葉とそれを発するときの目により、相手はガラッと対応を変える。こういう実践的な愛の実力をぜひものにしてもらいたいし、実際に家庭でも職場でも使える人間になってもらいたいと思います。素晴らしい人間関係をつくることは、何よりも人生においての財産となります。仕事も人間関係によって発展していくものですから、心の通い合う、信頼できる人間関係をたくさんつくっていく力を養っていってもらいたい。それが愛の実力というものです。**

**最後の第８番目ですね、「統合能力は愛の実力である」。今、全世界が統合という言葉で動き始めております。統合という言葉は、異なるものを結びつけていく力のこと。考え方の違う人とどう関わるかも統合能力なんですよ。企業レベルで言えば、自分たちと異なる仕事をしている企業ともし統合したのなら、どんなことができるか、それほどの利益が出るか、それを考えるのが、それが統合経営というものです。これまでは単独経営といって、自分の会社からだけ利益を出す経営が主体でした。これからはいろんな会社と統合関係を結んで、協力し合いながら発展してくやり方を考えていかなければなりません。統合という言葉の意味は、単に足し算ではない。どれだけの相乗効果が出るかが大事な目的なんです。どこと組んだら一番会社が輝くか、また、誰と誰を一緒に組ませたらもっとも能率が上がって、楽しく働けるか。これは統合という言葉を使ってつくり出さなければならない職場環境の問題であります。**

**異なるものを結びつけるということを違った言葉で言うと、矛盾を生きるとも言えます。理性は矛盾を排除する。だけど、感性は矛盾を受け入れる。愛は考え方の違う人と共に生きる力なんだ。愛は短所を許す力なんだ。これは理性ではできない。長所も短所も愛する…これは矛盾を生きるということなんですよ。これからの時代を生きていくためには、これからの時代において仕事を発展させていくためには、矛盾を生きることが求められているということをよく考えてもらいたいと思います。考え方の違う人とも一緒に仕事ができる、そうでなければ本当の統率力、まとめる役割の長たる人間にはなれません。もっと統合能力を磨いて、器の大きな、度量の大きな、包容力・統率力のある組織人として成長していくことを考えなければならない。これは人格の大きさとも言えますが、対立を乗り越えて、新しい成長の仕方をつくっていく原理が統合ということなんです。**

**これまで多くの人が勝ち負けを争って、勝ちにこだわっていましたが、これからは勝つより素晴らしいことがあると、理解することが大事になります。力を併せて共に成長することの方が大事。そういう愛に基づく生き方というものが、これからの企業活動においても大事なテーマになってきています。お互いに助け合って、短所を助けてあげて、長所を使わせてもらって、パートナーシップの協力関係を築いていく意識が大事なんですよね。とにかく、時代の大きな流れが統合という結びつける力が要求されている。その根本が、愛なんです。そういう意味で皆、愛されたいと思っているのだから愛をあげなければならない。理屈で物事を解決するのではなく、心の結びつきをつくりながら、心の通い合いを通して問題を解決していくという生き方を大事にしていかないと、人間的な組織、人間性豊かな組織、血の通った温かな心が通い合う組織をつくっていくことはできないと思います。もっともっと組織・会社というものが利益を追求するだけではなく、会社の中で一緒に仕事をすることが人間として楽しいというような組織にしていかないと、心の時代と言われるこれからに会社そのものを発展することはできない、生き残っていくことも難しいかと思われます。もっともっと心を大事にして、心が欲しいという叫びにどう応えていくか、そういうことを十分に心しながら、職場の中の仕事をやっていってもらいたいと思います。ぜひ、人間は不完全であることを責め合わないで、相手の不完全なところは自分が補ってあげようという意識も強く持ってもらいたいと思います。**

**会社の中でも考え方の違いや感じ方の違い、家庭の中でもいろんな問題があり、一筋縄ではいかない問題を抱えている人も多いかと思いますが、とにかく、心の結びつき、通い合いをつくる努力をしながら、お互いが愛というものの実践的な使い方をちゃんとわきまえながら接してもらいたい。愛とは他者と共に生きる力。同じ考え方の人間とばかり付き合っていたら、愛はいりません、理性で十分です。なぜ、我々はいろんな人と仲良くやっていくことが大事な課題なのかと言ったら、我々の命の底から湧き上がってくる欲求は、できることなら皆と仲良く信じ合って生きていきたいという気持ちなんですよ。命の底から湧き上がってくる欲求に応えるということが、人間として人間性を持って生きる基本であります。**

**違った考え方の人とやっていけない、性格の違う人とはやっていけない…それは社会性がないんだ。人間は社会的存在だから考え方の違う人間とも、価値観の違う人間とも、宗教の違う人間とも仲良く生きていける力をつくっていかなければならない。理性で対立をして矛盾を排除し、画一を追求するのは近代的な生き方を早くやめなければならない。本当に命の底から湧き上がってくる欲求に応えるような生き方をこれから我々はつくっていかないと、新しい時代をつくり出していけない。理屈を超える愛に基づく生き方、矛盾を生きる生き方をしなければならない。**

**21世紀になってから統合という言葉がよく使われています。いかに時代が理屈を超えた愛の力を求めているのかが感じられます。それを感じてもらいたいと思います。時代が求めている愛を自分のものにしていくためには、まず相手と間で心の通い合いをつくっていくことが大事である。そのための根本原理は、愛されたい思いに対応して、愛する力を成長させていく。与える愛を成長させていく。愛を与えるとはどういうことなのか。それをわかっていないと、組織の中で部下を率いて仕事をしていく指導力、リーダーシップというものもとっていけないのではないか。多くの部下が反発するような理性的な冷ややかな人間になってはいけない。部下がついてくるためには心の繋がりが必要だ。そのために愛されたいという気持ちに対して、愛をあげるということも考えていかなければならない。血の通った温かな心を表現するためには、わかってあげる、認めてあげる、褒めてあげる、愛してあげる…そういうことを常に心の中に置いて、人間関係や心の処理にあたってもらいたいと思います。**

**とにかく、世界が、歴史が、人類に愛の実力を求めているということを強く感じてもらいたい。なぜ、人倫の崩壊が世界を襲っているのか、それは理屈ではない愛を原理にして生きる力を人類に持たせようとしているから。もちろん理屈も大事なんですが、理性を使いこなして愛の力で生きる時代がこれからやってくるわけであります。理性を手段能力に使いながら、愛というものを成長させて、愛の実力を使って、物事を解決していく。今日はそういうことをテーマにして、いろんな角度からお話をさせてもらったのですが、一番大事なことだと思うのは、愛されたいという思いに対して、愛を与える。愛されたいという心にどう応えてあげるかが大事なことです。皆、愛されたいと思っているのだから、愛する力、愛を与える力を磨いていかなければならない。理性も大事だが、もっと大事なものは愛の力。それなしには人間的な組織、人間が幸せを感じる社会はつくれない。ぜひもう一度素晴らしい人間関係をつくるということを意識しながら、今日お話したことをいろいろ考えてみてもらいたいと思います。ということで、今日は「愛の実力」ということをテーマにお話させてもらいました。どうもありがとうございました。**